

戸田のつぶやき

「evidence とは何か①」

evidence とは直訳すると、「根拠」、「証拠」、「証言」などとされている。evidence の意味を「根拠」と理解している人は多いと予想する。さて、この「根拠」を国語辞典で調べてみると、「根拠」とは「判断・推論などを成り立たせる拠り所」、「行動などの正当性を与える事実」とされ、使用例としては、「立論の根拠を明示する、または、上に説く所の理に根拠し」などがある。この意味を鑑みると、evidence という言葉には、セオリー（理論）やメカニズム（仕組み、手順、構造）といった言葉の意味も含む。我々、臨床の専門家の実践には、「根拠」が必要だということについては自明である。中山の論文でも紹介されているが、そのような潮流の中 1996 年日本で、「根拠に基づく医療（Evidence-Based Medicine : 以下、EBM）」が紹介された。EBM の定義は「よりよい患者ケアのための意思決定のために、現時点の最良の臨床研究によるエビデンス、療者の熟練、患者の価値観、状況（患者の個別性と医療を行う場）の 4 要素を統合すること」（中山 2020）とされている。しかし、EBM の誤解が根強い事も指摘されており、ランダム化比較試験の絶対視や、患者の多様性・個別性を尊重しない態度に警鐘が鳴らされている。

医学モデルの中での疾病の回復などは、数字で可視化しやすいと考えられる。一方、福祉領域における「効果」の可視化は医療とは性質が異なる。そこで、重要になるのは「健康」をどのように定義するかである。つまり、医療も福祉も共通する目指すべき方向性は「対象者の健康」であると考えられるが、その健康の定義における扱うポイントが違う。WHO の定義は「健康とは、身体的、精神的、社会的に完全に良好な状態であり、単に病気がないとか虚弱でないということではない」としている。一方、Huber らの定義は「適応してセルフマネジメントする力」としている。健康を状態としてではなく、力として捉えなおそうとしたものである。どちらの定義でも医療、福祉に置いて重要なものとなる。しかし、後者の Huber らの定義にある「適応してセルフマネジメントする力」を、如何にして evidence を可視化するか、検討する必要がある。（次月に続く）

深谷太一弁護士 連載コラム②

【人の中で治る】



今回は友人の当事者が書いたものでヨハクさんの理念と共鳴すると感じたものを紹介させていただきます。

「精神病は人の中で治る」この言葉を最初に聞いたのは、寿町で働く精神科の先生からでした。それを聞いた時、確かに私もそうだったと、すごく衝撃的でした。ほかの先生方もそう思っている様で、これからの精神病の治療に期待が持てました。学問的には分かりませんが、私の 30 年間の経験によれば、人の中で傷つくから発症するもので、その傷を癒すのも、また人の中でという事かと思われれます。特に自責の念が一番よくない様です。自分を否定的にとらえるのもよくありません。人とは違う自分を認めることが大切だと思います。その為には、人の優しい言葉、励まし、叱咤激励が、必要なようです。お互いに、他人の良さを認め合える世の中になれば、精神病になる人も、少なくなるのではと思います。心理学的な解決方法でも解決できると思います。最終的には、自分で自分を認められれば、精神病は治ると思います。専門家との対話が重要になると思います。神の時を待たなければ、最終的には治らないものかもしれませんが。 コアラ



おすすめ Activity

「ボルダリング」

スタッフの長廻に勧められ、週末に本川越にある「ロッククラフト川越」に行ってきました。戸田は約 10 年ぶりの挑戦でした。

難易度ごとに色分けされたホールドや課題があるため、初心者でも自分のペースで楽しむことができました。ボルダリングは体力だけでなく、戦略や問題解決能力も必要とされるスポーツだと感じました。次の日は手に力が入らず、数日筋肉痛となりました（笑）。これからも機会があれば通って、さまざまな課題に挑戦していきたいと思います。

おすすめ BOOK

「こんな夜更けにバナナかよー筋ジス・鹿野靖明とボランティアたちー」

渡辺一史 著

筋ジス、鹿野靖明氏とそのボランティアたちの格闘の紀。そして人と関わるとはどういうことか考えさせてくれる作品。対人援助という仕事をしながら迷いが生じた時にこの作品を読むと気持ちがシュッとします。

（看護師：小川真紀子）